書評

メルロー・ポンティ著（滝浦静雄・木田元訳）『行動の構造』

水野和久

一

『行動の構造』（一九四二年）は『知覚の現象学』（一九四五年）とともに、メルロー・ポンティの二大主著の一つであり、いずれも学位論文として提出されたものである。前者においてメルロー・ポンティが目指したことは、意識と自然との関係を行動の概念の分析を通して解明することである。というのは、行動の概念は精神的なものと自然的なものとの古典的な区別に対して中性的であるため、行動から出発することはこの区別の本質をあらためて問い直す契機を与えるかも知れぬからである。まず第一章において、メルロー・ポンティは原初的な行動にかんする反射の理論を反省することからはじめている。第二章においては、もっと高等な行動において要素的実在的見方が妥当かどうかを吟味し、第三章において、実在の因果的秩序でなく意味の三つの秩序を取り出し、最後に第四章において、知覚と行動の現象学の立場から心身関係を論じている。

因みにいえば、この最終章のテーマは『知覚の現象学』において《現象的身体》にかんする現象学的記述へと展開していった。そのため『知覚の現象学』においては『行動の構造』におけるような発生的ともいえる意味の三次元の区別は表面に出ないで、一種の《生世界》にかんするメルロー・ポンティの現象学が記述されることになった。

二

『行動の構造』第一章において、メルロー・ポンティは《反射行動》の古典的な考え方を批判してゲシタルトの概念に到達する。反射の古典的な考え方は、刺戟と反応の間に要素的な一対一対応の関係を設定する。たとえば或る動物が耳を掻く刺戟の作用は、耳のなかにある解剖学的に明確な触覚的受容器の数だけの部分作用に分解されることであろうし、この刺戟に対する耳をパタつかせる反応も、幾つかの要素的収縮運動に分けられるであろう。こうして神経中枢が鍵盤にたとえられたことがよくあった。しかしメルロー・ポンティは疑問を提出する。はたして刺戟の《布置》constellationは、ピアニストの指がピアノに作用するように有機体に作用するのだろうか。もしそうだとしたら、有機体の反射運動はピアノの弦の孤立した物理的諸現象と同じような、ばらばらの瞬間のモザイクと考えなければならないであろう。たしかに私の手が捕獲具をもって、もがいている動物の動きを逐一追求するとき、私の運動はどれも外的刺戟に反応しているといえる。しかし私が自分の受容器をその

影響下に置こうとする運動がなければ、その刺戟作用が受け入れられることすらないというのも本当である。刺戟と反応が交代的に働いている場合、その間に因果関係の一方通行を設けることはできない。メルロー・ポンティは、対象の特性と主体の意図は交錯しつつ新しい全体を構成するという、ワイツゼッカーの言葉を引用する。むしろ刺戟のゲシタルトは有機体が自らを外に差し出す仕方によって創造されるといわなければならない。有機体が存続するためには周囲の物理的化学的動因に出会うことはさけられないが、しかし有機体は受容器の固有の本性に応じて、環境世界のなかから刺戟を選ぶのである。刺戟が布置をもち全体的形態をとるようになるのは、神経系の全体的状態や有機体の保存に必要な能動的関与に依存するのである。十全な刺戟は、有機体と無関係にきめられる物理学的事象ではなく、あくまで生物学的事象である。反応を直接発動させるものは興奮のゲシタルトなのであり、物理化学的動因はそのゲシタルトの原因ではなく機会であるにすぎない。このことは次のことをも保証する。すなわち刺戟をうけとる場所と反応する筋肉とを結ぶ神経系は、生理学的原子論が考えるように一定方向にのみ流れる系ではなく、交互的なものだということ、神経の求心性と遠心性はたがいに分離したものの単なる接続ではないということである。

しかし刺戟と反応との全体的交互連関を指摘することによって、メルロー・ポンティは、機械論を排して目的論から反射を理解しようとしているのではない。不当にも低級といわれる神経機能にもすでに意図的なものがみとめられると同時に、高級な知的機能にも盲目的なものが残っているという事実を説明しうる概念は、これまでのところ、ゲシタルトだけだと彼はいうのである。それは行動の組織化や《統合》integration には段階があるということである。

なるほど有機体において、すべてがすべてに依存しているというだけならば、法則も学問も存在しないであろう。しかしゲシタルト学説は、それが単に部分のモザイクの説を拒否するのと同程度に、自然の絶対的統一という空想的な考え方をとっているのではない。現象の自然的分節にしたがった構造分析を行うことは、現象を物体的な単位に分解しそれを寄せ集めることとは、はっきり別のことである。古典的な立場から定義される反射は有機体の正常な活動をあらわすのでなく、有機体の人工的に孤立させられた部品を無理に働かせたときに起す実験室の行動であるか、または病理学的な反応である。原子論的にとらえられた純粋な反射に近いものが見うけられるのは、個体発生においてもずっとあとからである。このような反射が行動の基本的要素をなすとみるのは擬人的錯覚であるにすぎない。

三

第二章において、より《高等な行動》を取扱うにさいして、メルロー・ポンティはまずパブロフの条件反射学を正面からとりあげて批判する。パブロフは行動の記述からはじめようとしながら、実際はその記述がすでに一つの理論になっている。そ

こには複雑な刺戟は単純な刺戟の総和だという先入見がある。これは実在的分析の原子論的要請にもとづく人工的構成理論であり、物体の世界にふさわしい断絶を有機的活動のなかに移しこもうとするものである。問題は、大脳中枢の解剖学的観察から有機体の行動の分析へ進むときに、実在論的偏見が働いているのではないかどうかである。これは、機能局在論が行動の構造分析においてどういう意味をもつかという問題でもある。

これを明らかにするために、メルロー・ポンティは、ゲルプとゴールトシタインおよびボイテンディクなどの研究成果を参考にしながら、まず機能傷害が行動全体に対してもつ意味を明らかにしようとする。患者の動作は正常人の動作から単なる部分の引算によって演繹することはできない。中枢部損傷の効果はその場所によりもその広さに依存するのである。かりに神経系の中枢領域が、受容神経末端部のように自律的伝導体の束にすぎないならば、中枢部損傷によって惹起される障害は末梢に起源をもつ障害と同じ質のものであるはずであるが、実際には中枢の損傷の場合は、態度習得の一般的障害が起り行動の組織化の機能が麻痺するのである。行動の条件は皮質の中枢に進むにつれて、末梢の場合のように神経実質そのもののなかにあるのではなく、ますます神経実質の全体的活動の質的に変りうる諸様式のうちに見出されるようになる。正常人の場合とちがって、患者の場合はその行動に質的変容があらわれる。いいかえれば、患者と正常人との間には行動の《統合》に度合の差がある。

行動と大脳の関係のなかに生理学のカテゴリーをこえてゲシタルトの概念を導き入れることによって、メルロー・ポンティは条件反射説による学習論をこえようとする。或る出来事が刺戟となる場合、それは即自的には実在的な部分をもつが、反応する有機体にとって対自的には《状況》の意味をもち、これが有機体の反応を決定するのである。しかもこれは出来事自体には含まれていないものである。行動には多少の分節をもった構造があり、本質的にいって行動は反応体にとってなんらかの《意味》をもつ《状況》にかかわるものである。それゆえ同一の出来事が二つの意味の《状況》となりうる。一は反応がその状況に応じ切れぬ病的な《崩壊》desintégration である場合、他は反応が新しいタイプの行動の組織化であり《統合》intégration となる場合である。

行動の構造は物体でもなく意識でもないから、知性にとっては、それは一種の不透明な部分を失わない。要求されるのは《知解》intellection ではなく《了解》comprehension である。動物から意識を拒否することは、動物を自動装置とすることであってはならない。動物もその行動をさまざまの程度に統合している《別の実存》である。有機体が経験するということは、行われた実在的運動を記録することではない。経験とは或る型の状況に対して、意味だけが共通なさまざまの反応によって応答する一般能力すなわち《傾性》aptitude を獲得することである。

四

しかしゲシタルトの概念をもってパブロフを越えることは、メルロー・ポンティがゲシタルト学説を最終のものとすることではない。第三章において、彼はゲシタルト学説自身がもつ哲学的分析の不足を補うために、物質・生命・精神という三秩序があくまで実在的因果性を度外視して意味連関として考察さるべきことを主張する。行動を規定するものは、行動の占める物理学的場であるよりも、その生物学的な場である。さらに象徴的行動に注目するなら、われわれは第三に心的場を導入しなければなるまい。その場合、唯物論と唯心論、唯物論と生気論のそれぞれの二律背反をこえるためには、物質・生命・精神という三つの構造の特性と考えられる量・秩序・価値というカテゴリーがあらゆる段階のゲシタルトの世界にもいくらかは存在していることをみとめなければならない。いいかえれば、これら三つの構造は《統合》の違った程度をあらわしているのである。真に実体の概念を放棄する哲学においては、ゲシタルトの世界だけしか存在していないのであって、異種のゲシタルトの間にはなんらの派生的因果関係をも想定することはできぬはずである。生物的ゲシタルトや心的ゲシタルトの存在を支えるために、物理的ゲシタルトを要請することは許されぬはずである。ところが、ゲシタルト心理学者たちは、人間の身体を物理的世界のなかに置き、その物理的世界が反応の原因となっているという。物質と生命と精神の統合ということを、物理的ゲシタルトという共通分母に還元するとき、ゲシタルト心理学はせっかく構造についてのさまざまの考察をしておきながら、誤った科学主義の偏見に陥っているのである。これに反して、真にゲシタルトの概念に立ちかえることを欲するならば、むしろ物質・生命・精神は実在的因果性の秩序ではなく意味の三秩序と解されなければならない。

物理的系の統一は相関関係の統一であり、有機体の統一は意味の統一である。生物学にとって意味的統一というカテゴリーはアプリオリでさえある。物理学的思考が行うように、生命現象を法則によって整理してゆけば必ず余りが生ずるのであり、その余りに近づくためには意味による観点が必要となる。生命の弁証法を物理化学的関係に飜訳することができるという要請を肯定することは、科学的思考成立の論理的順序を逆倒させることである。科学的認識は知覚されたものから整理されたものへ発展するのであって、知覚や行動の現象的領域を整理された即自的秩序へ吸収することは一種のアナクロニズムである。

同じことは人間的秩序を考える場合にもいえる。意識や精神を生命に還元する生気論はやはり生物主義の偏見といわなければならない。《生命的状況と本能的反応》との弁証法が《刺戟と反射》との弁証法に還元できなかったのと同様に、《知覚された状況と労働》との人間的弁証法がもつ独立性を十分に認めなければならない。ヘーゲルが、自然を変容する人間活動の全体を示すために用いた《労働》という概念は、単なる本能的行動ではなく、人間的行為と意識とを結びつけて考えるためには

必要な概念である。人間とは、生物学的自然の上に経済的文化的な第二の自然をつけ加える能力なのではない。動物的要素の上に理性を加算するという意味でなら、人間を《理性的動物》などと定義することはできない。上級秩序の出現は、下級秩序からその自律性を奪って統合の新しい段階を生む。そのとき、生命的行動は新しい全体のなかに再組織されるため、生命的行動としては姿を消すのである。理性や精神の出現は自足しているはずの本能をも変容させる。動物は去脳しても存続しうるが、人間において上級中枢を摘出することは死を意味する。人間とは、すでに創造されていた古い構造を《超越》dépasser して新しい別の構造を創造する能力である。人間の《労働》にはすでにこの超越運動が含まれている。猿も一片の枝を食物を引き寄せるための道具として使用することができるけれども、直接の道具を準備するための間接的道具を作ることは猿には困難である。これができるためには、一つの物を多くのアスペクトから見うる能力が必要なのであり、人間的労働の意味はまさにこの能力に存しているのである。

とはいえ、労働において人間が製作するとき、最初から目的と手段の間の相互に分離した外的関係を想定することは、知的構成にすぎる。われわれの原初的な意識は、表象的自己意識になる以前に、自身にも不透明な意味志向である。幼児の意識のなかで体験されるものは、いわゆる感覚的記号や明確な価値表象である以前に、情緒的意味や表情である。しかしこれは、人間的世界が幼児の周辺に、幼児の出現以前から、存在していたからではなく、幼児の意識は、人間的対象が使用されるのをみたり、自分でも使用してみることによって、その使用行為や使用対象のなかに示されている人間的意図を生きるのである。文化的生産物を利用することは、それを生産した労働の意味を多少とも体験することである。原初的意識が目指すものは、真なる対象を把握することではなく、人間的意図を了解することである。それは、環境のなかで関心のあるものと情緒的に接触することであって、認識的で公平な活動などではない。

五

さてメルロー・ポンティがここまで論じた跡を辿ってみれば、第四章において心身関係について、彼がどのように述べるかは容易に想像できるであろう。

実在論的な見方によれば、外的物体が身体に働きかけ身体が心に働きかけることによって知覚が生ずるとされる。むろんこのとき、外的物体と身体上の印象の間に類似を求める必要はないけれども、網膜に形づくられる像が二つであるのに、知覚される対象は一つであることを説明しなければならない。そのためにデカルトは身体と知覚との媒介点として《松果腺》を仮定したのである。物体的身体から現象的身体を因果的に説明するために生ずるこうした困難は、知覚現象を機械的分析の見地からとりあげること、すなわち実存を本質へ還元することに由来している。

これに対して批判主義的な見方によれば、知覚とは所与的素

材を或る関係のなかでとらえることである。ここでは意識は二つの面をもっている。一は世界の中心としての観る主観であり、他は世界によって条件づけられた質料としての意識内容である。批判主義がこの二つの意識の関係を論理的に整合化しようとすれば、『感性論』を『分析論』へ吸収する形で相互に隙間を埋める以外に方法がないであろう。しかしそうなれば、先験的領域のなかの意味連関は論理的包摂の関係のみとなり、ここでも本質は実存を凌駕してしまうであろう。

結局われわれが帰りつくべきところは、知覚と行動の直接経験という現象的領域しかない。直接経験においては、物体はつねにパースペクティブをもってあらわれる。これはパースペクティブが主観的附加物だというのではない。むしろパースペクティブは物の諸特性なのであり、そのなかでわれわれは物そのものに達する。物体は超越でありながら開かれているのである。同様に、自我の志向はつねに身体的運動というパースペクティブを通して表出される。身体は志向の生きた外皮である。現象的身体は一方で自我の志向を表出し、他方で物体の意味に反応する。身振りにおいては内外の意味交流が生じている。

むろん身体がつねに十全な意味をもつとはかぎらない。往々にして意識は身体の低抗に出会うことがある。とくに病気のとき、われわれは心身の分離を経験するであろう。失語症患者の心は身体的表現手段を失って次第に貧弱になるであろうし、身体も心によって示される意味を失えば、現象的身体から物理化学的塊になるであろう。これは《統合》の《崩壊》した現象である。

たしかにわれわれは、日常経験においてさえ飢えや渇きが思考や感情を妨げるような場合、人間の《統合》作用はもろくも心身の二元性へ分離するという挫折の経験をもつことがあるが、それでもこの二元性は実体の二元性ではない。心身の関係には《統合》の段階がある。化学的構成要素の塊としての身体が存在しうるし、生体と生物学的環境との弁証法としての身体がありうるし、自己と他者たちとの弁証法としての身体がある。身体の《習慣》は、その都度の自己に感知できぬほど微細に蓄積された生活歴である。それゆえ、物質・生命・精神というそれぞれの次元において心身の二元性が観察しうるとしても、《統合》の諸段階は、それぞれ前の段階に対しては心であり、次の段階に対しては身体である。上級の行動のなかにはつねに下属の弁証法が保存されていて、全体が正しく働いているときは、この下属の弁証法はその中で認知できない。しかし部分的傷害があって《統合》が《崩壊》するとき、下属の弁証法が確認されるようになるのである。

六

いま私の手許にあるのはメルロー・ポンティ著『行動の構造』第三版 (Maurice Merleau-Ponty : La Structure du Comportement, 3e éd.) とその邦訳（滝浦静雄・木田元訳、みすず書房）である。私に要求されたのは邦訳を通じての書評であったと思われる。が、原典を通覧したのは、邦訳が出る以前であっ

たため、ここで原典文と邦訳文とを逐一対照することをしなかった。むしろ全体を要約的に紹介することで書評の任を果そうとした。それは、この書がメルロー・ポンティの主著の一つであり、要約によって彼の思想の特徴を示すことだけでも無意味ではないと考えたからである。しかし邦訳について一言すれば邦訳のみを通して再度この書に接してみて、以前に曖昧に思われた生理学的特殊用語について、その訳註の助けもあって、より分明になった数箇の点があった。また、原典本文が四つの大きな章にわかれているのみで、連続で書かれているのに対して、邦訳は、原典目次にのみ付された見出しを本文中に適切に挿入することによって読書を助けている。なお、邦訳巻末には、原典にみえぬもの、すなわち人名索引、事項索引、およびメルロー・ポンティの年譜と、英訳から借用された参考文献表が付されている。

（筆者　大阪学芸大学講師）